

四つ葉のクローバー

季刊



のたより

No.8

進化させよう！

ハードエネルギー社会からソフトエネルギー社会へ

「原発を考える会・玉川学園」

2015年1月1日発行

## 「希望」を作り出す映画

映画監督 鎌 仲 ひ と み

東日本大震災に伴う東京電力福島原発事故からこの方、ずっと一本の映画を作ってきました。それがようやくこの10月に完成しました。タイトルは『**小さき声のカノン**—**選択する人々**』。この3年あまり、私たちが暮らすこの社会に起きたことは「激動」と言うにふさわしい状況だったと思います。震災や原発事故だけではなく、現政権による様々な戦争につながるような法律の制定などが続いています。



かつて、イラクを取材した時ミサイルが日常的に打ち込まれ、生活圏が放射能に汚染され、インフラも戦争で破壊された中で人々は暮らしていました。そんな凄まじい状況のもとでも、人というものはささやかな幸せや喜びを見出していくものだとは私は教えられました。家族がいて、子供が居て、明日はどうなるかわからないけれど、なんとか今日一日もみんなで貧しいながら食卓を囲み、ささやかでもろいけれどもつかの間ながらの平和な時間があります。

日本は豊かで、テレビには笑いと娯楽があふれている一方、その裏で非常に多くの子どもたちを含む人々が被ばくを強要させられています。原発事故で汚染された土地に住む人々は一見、平常を装って暮らしていますが

心の中には大きな不安を抱えています。

不安を言えない、我慢するしか無い状況があるからです。そのことをマスコミは知らせません。なぜなら、政府＝権力がその被ばくは大丈夫だ、健康に影響が無い、と言っているから。例えば、福島県全体には広島原爆に換算すると約20発分の放射性物質が総量として土壌にある。日本の法律で16歳以下は立ち入り禁止とされる土壌汚染や空間線量がある地域に福島県内だけでも約158万人が暮らしている。非常事態です。心の平安が奪われている状態です。そしてチェルノブイリに鑑みれば、実際に健康被害は増えています。福島ではすでに103人の小児甲状腺ガンが見つかっています。2008年にはゼロだったのに、です。

「**小さき声のカノン**」には子どもたちを被ばくから守ろうと暮らしの中で奮闘するお母さんたちが沢山登場します。政治的でもなく、声高に意見を言う訳でもありません。しかし、具体的に不断に、取り組みを続けていこうとしています。そこにこそ、これからの希望があると思っています。  
(玉川学園在住)

【鎌仲監督の作品紹介】

- ヒバクシャ世界の終わりに (2003)
  - ・平和、協同ジャーナリスト基金賞グランプリ
  - ・地球環境映像祭アースビジョン大賞
  - ・文化庁映画賞文化記録映画優秀賞等多数受賞
- 六ヶ所村ラブソディー (2006)
- ミツバチの羽音と地球の回転 (2010)
- 内部被ばくを生き抜く (2012)

上映会報告

「**犬と猫と人間と**」 動物たちの大震災

去る10月5日、玉川学園コミュニティーセンターで上記映画の上映会を開催しました。豪雨が心配された日曜日でしたが、高校生を含む約50名の参加を得、用意された椅子は埋め尽くされました。

取り残された瓦礫の街に行く犬の姿から始まった映像はその後、動物愛護団体のボランティア活動を始め、そこで働き始めた女性の変化や被災男性とノラの再会、犬の遺骸の道端放置、さらには、福島で捨て置かれた牛舎の牛たちを生かそうとする数少ない人たちの心情を映し、動物と人間を巡る〈命〉の出会いと別れを見つめ、今の私たち人間のあり方を深く問いかけるドキュメントでした。個人的には、汚れ放題の牛舎の隅からカメラを見つめる一頭の牛の双眼から流れる涙(?)を見たのは衝撃でした。



上映後、ペットホテル「**ガルドン**」のオーナー・森猛氏と町田市議・渡部真美氏との対談が行なわれ、福島の現状及び町田市の防災についてお話を伺い、ペットを巡る質問、要望などを交換しました。

森氏はショップ経営の傍ら福島に足を運ばれること数十回、今でも犬と猫の保護活動を続けておられ、心底愛なくては語れぬ彼の活動と想いの数々を耳にすることができ、感動と充実の会でした。

(当会会員 武内 和美)

原発雑感 ①

期待するだけでは・・・

中 林 昭 雄

日本人の大半の人は「今日一日楽しければよい。将来は不安だけど、都道府県市町村行政・国が何とかするだろう」と思っている。

このままでは原発も再稼働すると思います。2020年、東京オリンピックで一部経済は潤いますが、地方は取り残されていきます。国はオリンピックに話題を向けさせ、原発問題を先送りするでしょう。再稼働率も50%以上に上げているでしょう。季刊紙【No.6】でリニア新幹線の問題を指摘されていますが、経済優先で国は推進するでしょう。

国は全て経済優先で経済学者も国に「ベッタリ」、経済問題でノーベル賞を受賞した人は誰もいません。国から見れば個々の不安・悩みなんて小さすぎて問題になりません。反対に、**どんなに小さくても国に解決を期待するだけでなく、自らの声を上げ国の進む方向に関心を持ち続ける必要があるのではないのでしょうか。**これを国への奉仕と呼びます。

(焼き肉店経営 成瀬在住)

「**原発ノ一**」の4つの理由

栗 田 正 勝

福島原発事故以来、国内世論は原発問題をめぐる推進派と反対派の論争で二分されている。小泉元首相は「想定外とはいつでも起こり得ることだ。日本は原発をやっちゃいけない国だ」と主張。菅元首相も「事故が起きるまでは『安全神話』を信じていたが、考えを変えた」とし、脱原発への転換を訴えた。しかし現政権は、現在停止中の54基の再稼働に執念を燃やしている。このため国内世論の対立が解消する見込みは全くない。私は1979年、世界初のメルトダウン寸前のスリーマイル島原発

事故当時、ニューヨーク特派員だったので、原発問題には大きな関心を抱いている。私は次の4つの理由から「原発ノー」と言わざるを得ない。

### <その1>

スリーマイル島事故後、チェルノブイリ原発事故と福島原発事故では実際に大量の放射性物質を放出するメルトダウンが発生し、「安全神話」は完全に崩壊した。原発は「トイレのないマンション」と言われているが、「地上最悪の危険物質の一つ」とされるプルトニウムを含む放射性廃棄物の処理方法は依然として確立されていないため、放射能汚染の影響は極めて長期間続く。メルトダウン事故では最低数十キロ圏内は文字通り不毛地帯となる。

### <その2>

推進派は、原発は「最も安価な電力源」と主張するが、使用済み核燃料の再処理費用、原子炉の廃棄費用など発電以外の費用を含めると、「高コスト電源」になる。

### <その3>

通称「原子カムラ」の原発推進派は伝統的な癒着体質にどっぷり浸かっており、国民の安全よりも自らの保身や利益の追求だけに関心がある。このため政府は早くも火山噴火などで影響を受ける可能性のある九州電力・川内原発などの再稼働に躍起になっている。しかも一部原発の廃炉と引き替えに電力会社の生き残りをなんらかの形で保障する救済策を検討中とも伝えられているが、救済費用が最終的には消費者の負担になるのは目に見えている。こうした悪循環は「原子カムラ」との癒着に汚染された体制下では永久に変わらないだろう。



### <その4>

政府は使用済み核燃料の生成物であるプルトニウムの増加に手を焼き、ウランとプルトニウムの混合燃料（MOX燃料）を既存の一部原発で使用するほか、プルトニウムだけを燃料とする高速増殖炉「もんじゅ」（福島県敦賀市）の稼働に向け突進している。1995年の大火災発生事故以来、本格的再開のメドは全く立っていない。欧米等の原発主要国は、技術的に未完成である高速増殖炉計画を既に断念しているが、なぜか日本だけが開発に固執しているのは極めて異様である。日本が国内外

に保管しているプルトニウムは約34トン（2009年）、世界で3番目に多い。原発一個分のプルトニウムは8キログラムとされているので、34トンは**原発4200個分以上**に相当する。このほか、使用済み核燃料に含まれるプルトニウムは何と**136トン**に達しており、政府はその再処理にも苦慮している。核保有国でない日本が大量のプルトニウムを保有するのは核拡散防止条約違反なのだ。政府は基本的には国内で再処理を行う計画だが、工場がある青森県六ヶ所村等では反対が強く、相次ぐ事故もあって**必要な処理能力は確保できていない**。さらに日本が大量のプルトニウムを保有していることから、米国内からも**日本の「核武装」に対する疑念の声**が出ている。実際、自民党などの保守勢力内には日本の核武装の必要性を指摘する向きもある。

このように原発問題は、単純に環境汚染だけの視点で論じても全体像は見えてこない。**あらゆる側面から検討しつつ、国民各層の一人一人が「原発ノー」の国民運動に参加する必要があると思う。**（成瀬在住）

## 四方山ばなしシリーズ NO. 8

### 「少量の放射線被曝なら心配ない！」

#### これって本当なの？

藤井石根

2011年6月17日、原発事故に関連し日本学術会議は会長談話のかたちで「100mSv以下程度の放射線被曝なら確率的にみて、ガンの発症率は受動喫煙や野菜の摂取不足によるものよりも小さいので余り心配ない」旨を明らかにしました。また、日本医学放射線学会も同月2日に「ガンで亡くなる人が30%にも及ぶ現在では、100mSv程度以下の更なる放射線被曝を受けたからと言って、それでどれほどの影響が出るか実証することは極めて「困難」などと発表し、被曝増により被害をできるだけ小さく見せかける政府のキャンペーンに手を貸すようなことをしています。しかし、こうした声明を聞いた皆さんはそれで一先ず安心できたでしょうか。専門家集団である学術団体が言うことだからと信じましたか？さて、現況に照らせば日々放射線にさらされている私達としては、**放射線についての正しい知識の持ち合わせが必要です**。文科省による放射線副読本（小学生版）では

「放射線は太陽や蛍光灯から発せられる光のようなもので、光よりモノを通り抜ける働きが強い」と説明されています。小学生が相手ならこの程度の説明で良いかもしれませんが、大人なら放射線は物質を透過してくる位だから巨大なエネルギーを持ち合わせており、**しかも透過の際には物質の原子から電子を引きはがす「電離作用」も伴うこと位は理解していなければなりません。**

他方、我々の身体は誰もが知っているように水素、酸素、炭素等の元素で構成されるDNA、染色体、それに蛋白質やアミノ酸など種々の化合物でできた細胞や、それによる器官で出来あがっています。この化合物は「化学結合」というエネルギーレベルで結合されていますが、これに比べれば放射線が有しているエネルギーレベルはその百万倍とも言われるほどに大きなものです。そうだとすればもし放射線が化合物に当たったらどうなるか容易に想像できるでしょう。当然、**電離作用によって化学結合は切断されて崩壊、身体にとっては細胞が破壊されることで大きな影響を受けることになります。**この事実から直ぐに察知できることは、悪戯に放射線に当たることは害が在っても益は全く無い、言うなれば**安全な放射線は無いこと**、また、これくらいまでの被曝なら**安全と言うような目安値（しきい値）も無い**と言うことです。



ところで、私たちの身体は大人で60兆個もの細胞から出来ています。細胞は分子から、分子は原子からできています。したがって生物体の放射線による障害は詰まるどころ、放射線によって電子を失った原子、いわゆる電離原子に起因しています。60兆個の各細胞には30億個の文字を包含する情報のテープ、すなわちDNAが組み込まれていて、その中のたった一文字が**変化しただけでも細胞がガン化する場合もあると言われています。**この**変化を放射線がおこさせるのです。**しかも、この沢山の細胞は最初はたった一個の受精卵から出発しています。これが幾度も分裂を繰り返してこの数になったのです。現に一個の受精卵は有糸分裂によって細胞を増やし続け、約3週間位で直径2mm程の大きさになり、すでに頭もできてきます。心臓が鼓動を始めるのは約20週間目、細胞数が26兆個までに増えると胎児は赤ちゃんとして生まれてきます。そして何れの場合でも分裂の際には染色体はほどけて、情報のテープは長く伸びて放射線の影響をより受けやすい状態になります。**細胞分裂の激しい**

**胚や胎児など、受精卵から赤ちゃんまでに至る過程での影響がとりわけ深刻**と言われる理由はここにあります。何れにしても盛んに分裂している細胞ほど放射線に弱いということで、この観点から判断すれば成長期の子供たちの方が大人より放射線の影響を受け易いことは言うまでもありません。しかし他方でガンは一般に成人病と言われていますが、これは年を取るにつれて増えてくる自然に起こる情報テープの写し違い、しかもこれを修正する役目の免疫機能も低下してくるからで、ガン発症の背景は違ってきています。

放射線に係わるこの辺の状況を物語る「ベルゴニエ・トリボンドーの法則」なるものが存在しています。今から100年以上も前の1906年に2人の研究者によってなされた法則で、そこでは**「放射線は分裂能力の高い細胞、有糸分裂を行う細胞、それに形態機能が未だ固定化されていない細胞に大きな影響を与える」**と説明されています。（明治大学名誉教授 当会顧問 玉川学園在住）

[注] 内部被曝の現実的な恐ろしさを知るためには、インターネットで「劣化ウラン弾と先天的奇形」などを検索してください。

**原発川柳**

- ・原子力欲も底なし臨界か
- ・ゴミ処理はほかでやってうちはイヤ
- ・災禍どう？答える術なく再稼働
- ・地震火山津波隕石想定内！
- ・核のゴミ毒消すだけで十万年

[川柳募集しています]

【編集後記】 川内原発再稼働の住民説明会が五ヶ所で開かれましたが、住民からの不安や疑問が噴出し、再稼働反対や廃炉を求める決議が相次いでいます。それでも強行姿勢の現政権！民意の軽さを痛感するこの頃です。

発行：原発を考える会・玉川学園  
<http://genpatsuwokangaerukai.jimdo.com/>  
 代表：八木ともみ  
[kusukusu-tomomo@willcom.com](mailto:kusukusu-tomomo@willcom.com)  
 顧問：藤井 石根、井野 博満  
 編集：浦谷 捷子(042-723-0979)  
 真田 さち子、武内 和美、村上 功子、  
 桃澤 洋子